



TITLE:

<書評> 山崎覺士著 『中國五代國家論』

AUTHOR(S):

毛利, 英介

CITATION:

毛利, 英介. <書評> 山崎覺士著 『中國五代國家論』 . 東洋史研究 2011, 70(3): 489-499

ISSUE DATE:

2011-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/192934>

RIGHT:

山崎覺士著

中國五代國家論

毛利 英 介

本書『中國五代國家論』（以下、本書）は、あとがきによれば、著者山崎覺士氏の二〇〇五年提出の博士論文にそれ以後發表の論文を増補したものである。山崎氏自身も述べるように、五代への關心は近年決して強いものとは言えない。ましてや史料にも限りがある。そのような中、五代十國諸勢力間の秩序というこれまで着目されてこなかった分野で一書をものされたのは、まさに意欲作というに相應しい。まずは本書の出版を壽ぎたい。

ただし、本書各章は既發表論文に基づくため、本書に個別論文を收録した論文集としての趣が存在することは否定できない。特に、タイトルが與える印象に比して吳越・杭州に關する研究の比重が大きいことは明らかである。しかし、書籍化に當たり充實した序論・結論が附せられており、一冊の書物として面貌を新たにして世に問われた側面も強い。ゆえに、既發表論文を讀了された方々にも再讀をお勧めするものである。

以下拙評を記すに當たり、まず本書の目次を示した後に要約を行う。なお本書にはすでに山根直生氏の專評があるので、併せ見

られることを望む。

目次

序論 五代政治史研究の成果と課題

第一部 天下のうち篇

第一章 五代の「中國」と平王

第二章 五代「中國」の道制——後唐朝を中心に——

第三章 吳越國王と「眞王」概念——五代天下の形成、其の一——

第四章 五代における「中國」と諸國の關係——五代天下の形成、其の二——

成、其の二——

第二部 天下のそと篇

第五章 九世紀における東アジア海域と海商——徐公直と徐公

祐——

第六章 唐末杭州における都市勢力の形成と地域編成

第七章 未完の海上國家——吳越國の試み——

第八章 港灣都市、杭州——五代における都市、地域、海域

結論 五代天下のうちとそとの形成

要約

序論。序論冒頭では、本書が五代十國における「國家」の諸相を明らかにすることを目標とすること、ここでの「國家」が前近代中國で天下と呼ばれた皇帝支配に基づく帝國的相貌を持つ社會的組織を指すことが宣言される。その後、まず前近代中國におけ

る五代史の語られ方が天下は統一されるべきだとの思想に束縛されていたことが指摘される。次に、従来の五代十國政治史研究は、その視點が五代を混亂期・過渡期と見るものであり五代諸王朝と江南諸國に分離して述べられる傾向が存在することを指摘したうえで、五代という分裂時代の「秩序」ある「國家」の構造を見据えることが必要とする。これを承け、天下Ⅱ世界説と天下Ⅲ九州（いわゆる全中國）説に分けて天下論の先行研究がまとめられる。山崎氏は、兩者を止揚しつつ後者に近い渡邊信一郎説を重視するため、本書での天下は九州を示す有限範圍のものとなる。渡邊説は、唐代天下を原則的に實效支配領域と考える一方で、徳治イデオロギーの及ぶ領域でもあるとする。しかし、五代において兩者は一致しないことから、山崎氏は歐陽脩の天下論を參考に五代「天下」が中原王朝の實效支配領域たる「中國」と「十國」から形成されるとし、唐代とは異なる「五代天下秩序」の存在を豫見する。その後、五代「天下」の統一性と同時に分離性にも留意する必要がある指摘され、兩者の特徴を體現する存在として吳越に注目する旨が述べられる。

以下「天下のうち」とされる第一部では、主に五代天下秩序に關わる諸點が論じられる。

第一章。本章では、五代における南平王・西平王等の「平王」について論じられる。

まず、五代「中國」の地理劃定裝置として平王に着目する旨が述べられた後、五代における王爵の用例が収集・分析され、國王・一字王・平王・二字王・郡王という序列の存在が指摘される。また、五代における平王が中原王朝の界限に位置することを明ら

かにし、平王によって地理的限定が加えられた地域が「中國」であったとする。次に、吳越（吳越國王）と荆南（南平王）を例として國王と平王を比較し、荆南には百官が存在せず管内の州刺史の任命権も存在しなかったとされ、平王は「中國」内に位置づけられるものとする。刺史の任命権の問題については次章で論じられる。次に、屢々叛旗を翻すという平王の特徴を指摘し、「中國」から離脱しようとする勢力への平王封爵は中原政權にとってその地が「中國」であることの政治的表明であったとする。最後に、南平王である荆南は一般に十國の一に数えられるものの、北宋初期には荆南を除いた九國という認識であり、十國という理解は歐陽脩らの歴史觀に影響されたものとする。

第二章。本章では、五代「中國」における藩鎮の道について、中央・道・州の間における文書のやり取りによる命令系統と地方財政から論ぜられる。議論の中心は後唐である。

まず、五代「中國」における道・州について概観し、後唐期には直屬州は少なく「中國」全土に道が配置されて各道は二―四州で構成されていたが、後晉中頃から直屬州が増加して各道は一―二州となり、太平興國二年八月の詔によって屬州が直屬化され中開行政區劃としての道が消滅したとする。次に、中央と道と州の關係について論じ、屬州の刺史は中央によって選任されたものの、中央の屬州への命令は道を経由し、屬州の上申も道を介したことを明らかにする。次に、五代「中國」の財政的特質として、中央財政の枯渴と藩鎮財政の富裕・節度使の蓄財を指摘し、その根底に上記のような道の中央政府からの一定の政治的自立があったとする。最後に、以上の論述から、唐宋變革期におきたのは從來言

われてきたような中央集権化というよりも中間行政區劃の機能變化であつたと結論し、宋代の中間行政區劃Ⅱ路の重層性に説き及ぶ。

第三章。本章では、「眞王」をキーワードに吳越國王について論じ、その五代天下秩序における位置づけを考察する。

まず、中原王朝による吳越國王の册命文が検討され、爵・命の觀點から吳越國王が諸侯の最上位に位置したことを指摘する。次に、吳越國王册命の際に玉册が用いられたことを指摘し、この點では吳越國王が諸侯より上に位置したことが述べられる。このような吳越國王の立場を、山崎氏は册命文に繰り返し現れる眞王の語で代表させる。次に、觀念面では眞王の語で表されるとされた吳越國王の實態的側面の分析が行われる。まず、吳越國王の中原王朝への貢獻物を検討し、吳越の貢獻は土貢的性格で制度化されたものであり、政治的從屬を表出する機能を果たしたとされる。

同時に、歴代吳越國王は天下兵馬都元帥に任じられることで征伐權を掌握し、覇者として諸侯を率いる立場、諸國の長として君臨したとされる。次に、五代期に中國の語で「中國」（中原王朝の實效支配領域）が表されたこと、吳越がその外にあったことが指摘され、「中國」が「中國」外に封爵を行うことで五代天下秩序が形成されたとする。最後に五代天下秩序を周代封建制と比較し、周代の王都は五代中原王朝の首都（開封・洛陽）、内服が「中國」、外服が諸國に相當するとされる。

第四章。本章では、前章を承けて吳越以外の諸國と「中國」の關係が述べられる。

まず、國書に着目して「中國」と對抗した諸國との關係が分析

される。分析は、諸國の首長が「中國」に對し皇帝と稱する場合と國主と稱する場合に大別して行われる。諸國の首長が皇帝を稱する場合は「中國」からは受容不可能であり、山崎氏はこれを「抗禮」とする。一方、國主を稱する場合は受容可能であり、これを「敵國禮」とする。ここから、國主號は皇帝に比して一段下つたものとし、それが「唐がウイグル可汗に與えた式」であることを指摘する。「敵國」とは、「中國」皇帝は國主に詔敕を下さないことから、獨自の命令體系Ⅱ法體系を持つ對等に近い國としてそのように稱されたとする。次に、諸國から「中國」への貢獻物を、贅澤品の私的贈與である「進奉」と原材料を納める土貢的性格の「貢獻」に區別し、その差異から「中國」に恭順であつた諸國について分析する。その結果、これら諸國は「進奉」・「貢獻」、更に中原國家財政を構成する專賣・商税の上供を行つたとし、「中國」内の諸道との差異は兩税の上供の有無にあるとする。それに對し、皇帝を稱した諸國は「中國」に對して「進奉」も「貢獻」も行わず、國主を稱した國は政治的從屬を意味しない「進奉」のみを行つたことが明らかにされる。そして、「中國」皇帝から國主・國王への下賜は定期的ではなく、「貢獻」・上供が五代「天下」を結びつけたとされる。

以下「天下のそと」とされる第二部では、吳越・杭州を主題として議論が展開される。

第五章。本章では、西曆八四七年に來日した唐僧・義空へ宛てられた書函群を主要な史料として、義空と密接な關係にあつた海商、徐公直・徐公祐兄弟を中心に論じられる。

まず、書函群からは中國海商の大宰府鴻臚館利用や和市・私貿

易の初期の實態が浮き彫りとなる。また書函群によれば、徐公直は先に婺州・後に蘇州の衙職を帯びた。この衙職は商業に關わる吏職化・形骸化したもので、刺史と商人の互酬的な關係を示すとされる。徐公直は蘇州を根據としたことから蘇州の衙職を帯びたが、そこには九世紀の蘇州の運河・吳淞江による海域との繋がりがあると考えられる。同時に、徐公直ら海商は蘇州一帯の農田開發にも携わり開發を促進させたとする。一方、婺州から蘇州への衙職の變化は婺州から蘇州への移住を示すと推定し、その背景として八・九世紀における婺州の人口壓を想定する。徐公直と同時期の婺州出身海商には越州を據點とする者もあり、これは九世紀に浙東地域が海港として登場する時期と重なる。論じられなかった刺史と佛教界の互酬關係とも併せ、徐公直兄弟は東アジア海域の轉換期における刺史・商人・僧侶の互酬關係を代表する人物と位置づけられると結論し、このような關係は宋代にも引繼がれるとする。

第六章。本章は、唐末の浙西・浙東の地域勢力の吳越への繼承を考察するものである。

まず、浙西では黃巢の亂による混亂をうけて杭州近傍の都市群に武裝集團が形成されたことが確認される。杭州八都そして杭州十三都であり、ここから杭州刺史として後の吳越國王錢鏐が浮上する。これら武裝集團は大運河及び錢塘江という幹線水路沿いの鹽業務機關所在地や錢塘江河口の海外貿易據點に立地し、そこには元來商業を通じて往來が存在したと考えられる。更に、武裝勢力間の具體的な紐帶として姻戚關係の存在が明らかにされ、これが吳越の礎となったとする。一方浙東でも流賊に對應して武裝勢

力が形成されたが、浙西と異なり縣城を避けて山間部に逃れ「寨」を據點にしたという特徴が指摘される。この理由として、浙東地域では縣城に城壁が備わっていなかったことが考えられる。しかし、山間部を根據とした結果、浙東地域では武裝勢力が分散化傾向にあった點に浙西との重要な相違點を見出す。ただし、これが結果として山間部開發に繋がったとする。このような状況のなか、鎮東軍節度使となった錢鏐は流賊が割據する浙東地域の諸州城を下し、九〇七年に實質上吳越が立國した。こうして海上交易と關係の深い浙東地域を杭州勢力が併呑した結果、浙西・浙東兩地域は不可分となり杭州は海域と連結するようになったとする。

第七章。本章では、五代天下秩序と密接な關係をもちつつ独自の「秩序」を模索した例として「吳越海上秩序」を提起し、特に初代吳越國王・錢鏐期に重點をおいて考察される。

まず、吳越の海上通交國について検討し、朝鮮諸國に封爵を行ったこと、日本に對しては商業活動上に「政治的秩序圈」が布かれたことが指摘される。その他契丹との關係にも言及される。また、吳越は中國大陸沿海部でも南漢・閩と同盟關係を結び山東半島沿海部に貿易施設を置いたこと、更に建元も行ったことが指摘される。このように、吳越は後梁に封爵される一方で独自の吳越海上秩序を建設したことが示される。そして、これは吳越の存した兩浙が海上商業の據點であつたことによるとする。次に吳越建國前夜の東・南シナ海交易圈について検討され、浙東は兩交易圈の結節點であり、吳越海上秩序は交易圈上に政治的秩序圈を敷設して成立したとする。しかし、吳越の正當性が中原王朝に依存する部分があつたことや、吳越海上秩序内の渤海・後百濟が滅亡し

たような不安定さを孕んでいたことから、錢鏐以降の吳越は五代天下秩序内の眞王へ收斂したとする。そして、五代天下秩序の枠を越えられなかったこと、東・南シナ海交易圏が吳越の政治秩序を必要としなかったことから、吳越海上秩序は自己規定的な「國家」とならず未完に終わったとする。

第八章。本章は、運河都市として出發した杭州が吳越期に港灣都市に變貌し、宋代には運河―港灣都市として展開するという見通しの下、特に吳越期の杭州について論じる。

まず、唐代の杭州が運河都市であったことを確認した後、錢鏐が杭州に夾城・羅城を築き杭州城を擴張したことを論じる。夾城を築いたのが軍事目的であったのに對し羅城は運河と海域を安定的に繋ぐ必要があったからとし、擴張された吳越期の杭州城の新たな復元圖も提示する。次に、吳越による杭州への防波堤・水門設置を指摘し、吳越期杭州の港灣都市化を具體的に論じる。そして、港灣施設の整備は、舟運による海域・内陸諸州との結びつきを深め、宋代の兩浙路誕生をもたらしたとする。また、杭州城内外の佛寺を検討して、運河から錢塘江にかけての重要水陸路上等に多く分布が見られることを明らかにし、逆に佛寺の分布から當時重要視された交通・流通ルートが窺い知れると指摘する。最後に、杭州が海域へ窓口を求めた背景として、五代十國の分立による大運河の機能不全とともに、砂州の廣がりに起因する港灣機能低下による揚州の没落とそれに伴う明州の浮上という八―十世紀にかけての東シナ海域への窓口の交代を指摘する。そして、明州を含めた錢塘江河口一帯の港灣複合體の中心として杭州が発達したとし、宋代に大運河の機能が復活すると杭州は海域と運河を結

びつける重要な中核となったと展望する。

結論。結論では、まず本論で述べられた五代天下秩序が一通り確認され、五代天下秩序を維持するための諸裝置を取り除くのが宋の「天下」一統であったとする。その後、諸國分立という性格をもつ五代天下秩序を、「萬國型天下秩序」という範疇を設定してこれに屬すると規定する。そして、「萬國型天下秩序」に「統一型天下秩序」を對比させつつ、周代から清代の「天下秩序」が検討され、紆餘曲折はあるものの「天下秩序」は脈々と存在したとされる。次に、五代における諸國分立の背景として、地域經濟の發達が指摘される。ただし、地域經濟の發達と同時に全國的物流も存在し、このような分立兼統一が表出したのが五代天下秩序であったと豫見し、その意義を見出す。そして、兩者のバランスが全國的物流に傾いたときに北宋による統一が生じたとする。ただし、地域經濟は消失したのではなく、路という中間領域として全國的物流を下支えしたとする。最後に、分裂時代として語られがちな五代を「秩序」・「國家」という觀點から見たとき、この時代が混亂・分裂と言うだけでは済まされないこと、延いては前近代中國の本質が見えることとされる。更に、「天下」を論じることは、前近代中國史における「國家」構造、そして地域經濟と全國的流通の相關關係にまで及ぶ論點を提示することになると結ばれる。

以上で要約を終え、以下拙評を述べる。ただし、紙幅や評者の能力の限りもあり、對象を本書全體のテーマである五代十國の國際關係（＝五代天下秩序）が主として扱われる第一部に限定することをご了承ください。なお、吳越・杭州を軸に議論が展開され

る第二部各章も實證的で學術的價值が高く、今後参照されるべきものであることを附言しておく。

さて、本書の主たる目的が、分離的側面から語られがちな五代という時代に統合的な「秩序」を見出すものであることを考えたとき、鍵となるのは「五代天下の形成」と銘打たれる第三章と第四章、特に中原王朝と十國諸國間の包括的な關係が論じられる第四章であると思う。よって、まず第四章について検討することによって本書全體への評價にかえたい。

要約で述べたように、第四章では國書と貢獻物の觀點から中原王朝と十國諸國との關係が分析される。そして、國書の分析では中原王朝に對抗した吳・南唐と前後蜀が取り上げられる。中原王朝の對應として、これら諸國の首長が皇帝を稱することは認めず、國主を稱することは認めたという指摘は明晰である。ただし、「敵國禮」と「抗禮」を山崎氏が言うように明確に分けられるかという點に限っては、用例が少なく疑問なしとはいえない。

次に、諸國の中原王朝への貢獻物を「進奉」と「貢獻」に分けての分析である。山崎氏も言うとおり、何が「貢獻」（＝土貢）かが必ずしも明白ではないという悩みは残る（二四一頁）。しかし、中原王朝に恭順な吳越・楚・閩等の諸國が土貢品を含めた物品を納めたという主旨は、稱帝以前の吳・稱帝放棄後の南唐（＝江南）という國主を稱する國の中原王朝に納めた物品が贅澤品・加工品に偏ることと照らせば大過なからう。また、皇帝を稱した南漢・前後蜀に「進奉」・「貢獻」は全く見られず、稱帝時の南唐もほぼ皆無である。よって、中原王朝に全く貢獻物を納めない皇

帝を稱する國・贅澤品のみ納める國主を稱する國・贅澤品も土貢品も納める國主に封ぜられる國という範疇分けは成功していると思う。

その他、國王に封ぜられる國でも楚・閩に對して吳越が上位にあることが第三章で述べられることと併せ、十國諸國が幾つかの範疇に分けられその範疇に應じて秩序をもつて中原王朝との關係が成立していたことが證明されている。第七章で多少言及される諸國間の「秩序」まで明らかとなれば萬全だが、史料も乏しくこれは望蜀の言である。つまり、本書の目的は充分に果たされていると言ってよい。よって、今後五代十國の國際關係について論じる場合は、本書で提示された山崎氏の五代天下秩序論を必ず踏まえねばならないと評價できる。

次に、評者の關心に従い、本書のいくつかの論點が五代だけでなく次の遼・宋代の國際關係の理解においても重要であることを指摘したい。

・眞王

眞王は、本書では吳越特有の位階として論じられる。それでは、吳越滅亡後に北宋が眞王の語を對外的に使用しなかったかと言えば、そうではない。これに關しては『宋大詔令集』政事・四裔所收の對外文書群を見るのが簡便なため、以下同書に基づいて述べる。

評者は、北宋にとって北の契丹・西の西夏・東の高麗・南のベトナムが理念的に重要であつたと考える。このうち、契丹は別格のためしばらく措き、以下その他の三國について検討する。まず

西夏については、景德三年「趙德明拜官封西平王制」・乾興元年「趙德明進尚書令加恩制」（いずれも卷二三三）に眞王の語が見られ、高麗は太平興國七年「王治拜官封高麗國王詔」（卷二三七）に、ベトナムは仁宗即位「李公蘊檢校太師加恩制」（卷二三八）にそれぞれ眞王の語が見られる。このように、北宋は吳越滅亡後にも主要な對外關係において眞王の語を使っていたことが分かる。

・平王

平王が宋代にも形を變えて存在したことは山崎氏も言及する（五七頁）。すなわち、五代末期の時點で南平王は荆南に西平王は定難軍節度使（後の西夏）におかれたが、それが宋初に荆南が滅亡すると南平王はベトナムに移り西平王は引き續き定難軍におかれたというものである。西平王は李元昊の臺頭で變化を迎えることになるが、それは次項で扱おう。

・國主

北宋前期において西平王に封じられていた定難軍節度使・西夏王であるが、李元昊が北宋に對し稱帝した後、妥協して北宋から「夏國主」に封ぜられることとなった。この際の北宋の對應は、皇帝を稱することは認めないが國主なら認めるという五代中原王朝の對應と軌を一にすると言える。ただし、北宋は夏國主に對して敕は下さないものの詔は下した。⁽⁵⁾これは、中原王朝と「致書」文書を交換して對等に近い關係にある五代期の國主とは異なるものである。よって、五代期に國主を稱するのは「敵國禮」であつたとの山崎氏の議論に對し、北宋期に西夏が國主を稱することは敵國の禮ではなかつたと思われる。

・敵國

本書で前項の國主と密接な關係で論じられるのが、（ほぼ）對等國としての敵國という語である。十國が滅んだ後に北宋に對抗する勢力として残つたのは契丹のみであり、北宋において敵國とは主に契丹を指す。つまり、北宋における敵國とは皇帝同士の關係である。翻つて、詳細は省くが、五代十國においては契丹と後晉・北漢との關係も相互に皇帝を稱する關係であつた。すると、このような契丹と五代十國との關係が本書で論じられた中原王朝と十國諸國の關係と統一的に把握することが可能かということも論點として浮上する。

以上のように、本書の論點には、五代十國に續く遼・宋代の國際關係史研究を考える上でも刺激に満ちたものが多い。よって、今後五代十國・遼・宋代を含む十・十三世紀のいわゆる東アジアの國際關係を考える際にも、本書は重要な起點となるだろう。そして、敵國（あるいは抗禮）の語は日朝關係史においても重要であろうし、日朝關係史を念頭に置くらば本書で論ぜられる國主號と「日本國主」號の關係にも議論が發展するかもしれない。このように、本書の論點は五代十國とは時間も空間も離れた分野を論じる際にも參考となる可能性を秘めたものとなっている。

ただし、以上のように優れた著作と評價できる本書だが、評者には違和感が拭えない點が一つある。それは、山崎氏が五代天下秩序モデルの基礎を歐陽脩の天下論（『五代史記』職方考、序文）におくことである（二二―二二、三六頁）。最後にこの點について記したい。

まず歐陽脩の天下論を基礎としたことによる全般的な問題として、山崎氏が提示した五代天下秩序モデルが、五代における同時代的な概念か、宋人の遡及的な概念か、山崎氏が史料用語を参照して規定した概念かが、評者には時に錯綜して感じられることがある。

更に、これに関連した具體的な問題として以下の三點を挙げた。それは、餘りに「固い」天下という枠組み、天下の「固さ」ゆえに影の薄い契丹、そして考慮されない五代という語の言説性である。以下これらについて論じたい。

・天下

まず天下について述べたい。山崎氏は、五代における天下の語が基本的に九州を指すとしたうえで、これを歐陽脩の天下論と結びつける。山崎氏の挙げる例から、五代における天下の語に九州を指す場合があることは確かである。しかし、山崎氏が五代における用例として挙げる詔敕中の天下の語が、イデオロギー的には九州を指すものの現実を伴わないことは山崎氏も述べるのとおりである（以上、十九～二十頁）。よって、この場合の天下とは、實態としては中原王朝の命令の及ぶ範囲とならざるを得ない。そのためか、例えば『舊五代史』に見える天下の語を見ると、漠然と華北（の情勢）を指すと理解可能な場合も多いように見受けられる。よって、五代の史料に徴したとき、天下の語が九州を指すことが一般的とは斷言できないように評者は感じる。歐陽脩が明確な形で天下の範囲を設定するのは、次項で論じるようにあくまで歐陽脩の思想と考えるのが妥當ではないだろうか。

評者の歐陽脩理解の當否は措き、本書書名に冠せられる「國

家」が「天下」である以上、五代における天下の語をより廣い用例から明らかにすれば讀者の理解に資したと思う。

これに関連して「中國」についても述べたい。本書で歐陽脩の天下論に基づき「天下」とセットで用いられるのが、「中國」（中原王朝の實效支配領域）である。五代における中國の語に中原を指す用法が存在することは本書一九頁で示される。ただし、『舊五代史』契丹傳の例（二三七頁）のように、契丹と對比して中國の語が用いられる場合も多い。この場合の中國の語が「中國」を指すのか、「夷狄に對する語」（三七頁）かは明確ではない。また、山崎氏が五代における天下の用例として挙げる詔敕中の「應（あら）ゆる天下」云々という例を考えた時、それに對して「應ゆる中國」云々という表現は一般的ではないと感じる。むしろ見られるのは「應ゆる諸道」云々ではないだろうか。つまり、五代當時に天下の語と對照されたのは諸道だとの感を評者をもつ。山崎氏も指摘する（三二〇頁）ように、吳越國王が諸道兵馬都元帥から天下兵馬都元帥に昇るのも示唆的である。

そして、この（諸）道を、山崎氏は五代中原王朝領内の存在とみなす（三二〇頁）。そうであれば「中國」と諸道は近似する。しかし、例えば湖南・嶺南・福建（＝楚、非稱帝時の南漢、閩）を指して諸道とする場合があるように、中原王朝から節度使に任じられた際には諸國は道としても扱われる。つまり、五代の道は「中國」の外にも廣がるものである。

以上から、歐陽脩の天下論に基づき「天下」・「中國」を對照させ、道が「中國」内の制度であるという圖式は、誤りとは言わずとも誤解を招きやすい説明だと思う。

・契丹

次に契丹について述べたい。そもそも、山崎氏の言う五代の「天下」は九州であり、基本的に契丹を含まない。その意味で、「天下」を論ずる本書において契丹の存在感が薄いのは當然である。ただし、山崎氏が「天下」の定義において依據した歐陽脩は華夷思想でも有名であり、契丹を含む「四夷」に關する見解についてもその言説性に留意が必要と思う。

本項で問題となる歐陽脩の見解とは、『五代史記』十國世家年譜における十國と四夷を同列に語るべきではないとのものである（三五頁）。これは、十國と四夷の扱いがなぜ異なるのかという宋人の疑問を想定してのものであった。例えば山崎氏も引用する（一〇九頁）「本朝以來、除四夷遠藩、羈縻冊拜、或有國王之號、而九州之内、亦無此事。」（『舊五代史』錢鏐傳）の一節を見れば、十國（ここでは吳越）は唐代の發想で言えは四夷に準じるとも理解可能である。よって、宋人が上記の疑問を持ったとしても當然と言える。つまり、實際には十國と四夷の區別は曖昧であり、ゆえに歐陽脩には十國と四夷との區別を語る必要が生じたのではないだろうか。

そして、『五代史記』四夷附録を見ると、冒頭におかれ量的にも最も多いのが契丹である。ここから、歐陽脩が四夷としてまず念頭にいたのは（封爵は行われないが）契丹と考えるのが妥當である。歐陽脩が五代の天下から四夷＝契丹を切り離したのは、五代當時の現實というよりも、あくまで歐陽脩にとつてのあるべき姿であり、逆説的に五代、そして歐陽脩の生きた北宋における契丹の存在の大きさを示すものと評者には感じられる。

ここで、五代中原王朝が契丹と十國に言及する具體例を見てみたい。『冊府元龜』卷九六帝王部敕宥顯德元年正月丙子の敕文では「幽州・淮南・西川・河東」が、同三月辛巳の制では「西川・（河）・淮南・契丹・河東」が列擧される。これらは、契丹・南唐・後蜀・北漢という後周に隣接して稱帝する國々を列記するものである。ここからは、殊更に契丹を十國と別扱いする様は看取できない。無論、これらのみで五代中原王朝の契丹認識は語りつくせないが、第七章において封爵以外を含む幅廣い關係が「秩序」として論じられる以上、契丹を含んだ形で五代天下秩序モデルが模索されてもよかつたのではないだろうか。

・五代

次に五代について述べたい。山崎氏は平王に關する分析において、十國という概念が『五代史記』など北宋仁宗朝以降に擴がつた歴史觀であり、五代十國當時の實態ではないことに注意を喚起する。評者はこれに同意する。そこで氣になるのは、山崎氏は五代という概念に檢討を加えていないことである。しかし、五代を書名に冠する以上、五代という時代の語られ方に加えて、五代という概念に對する檢討もあつてよかつたのではないだろうか。

五代として五代諸王朝をひと括りにし各王朝に差をつけないのも歐陽脩の歴史觀の特徴だが、その際に問題となるのは後梁である。それは、歐陽脩がその正統論において後梁の位置づけを大きな課題としたことにも現れている。無論、評者はここで正統論を展開したいわけではない。ただ、後唐以下宋に至る諸王朝が後梁を僭偽・間位と見なした（あるいは見なすことがあつた）のは、現實に後梁と後唐の間で統治層が相當規模で入れ替わつたことに

よる。それは、富田孔明氏の一連の論考や近年の沙陀研究⁽⁷⁾とも関連する。ゆえに、後梁と後唐の間には繼續面と同時に斷絶面が存在することに留意が必要と思う。

ここでは、後梁と後唐の斷絶面に留意しないことによる問題点として、後唐以降の南平王が荆南に置かれたのに對し後梁の南平王が廣州に置かれたこと（四六頁）を挙げたい。そもそも、五代の平王が實效支配領域としての「中國」の界限内側を示すとの山崎氏の主旨からすれば、後梁の南平王は例外的である。そして、假にこの場合の平王が示す領域がより理念的なものと考えたとしても、後梁が「中國」とみなす範圍が大唐を引き繼ぐのに對し後唐以降の「中國」は華北に止まることとなり、その相違は大きい。しかし、山崎氏はこの點を注での指摘に留める（六〇頁注一〇・六一頁注一四）。山崎氏は五代天下秩序の諸要素の完成を後唐・後唐間前後のこととする（三二頁）が、これに限らず後梁・後唐間での變化が發展のか斷絶のかは、慎重に考慮する必要があったと思う。

以上、山崎氏が五代天下秩序モデルの範を歐陽脩の天下論に取ったことに關する違和感を記してきた。おもに、これは五代の「天下」をモデル化した上で更にそれを中國史上に位置づけようとする山崎氏の野心的な試みと表裏一體のものであろう。そもそも、モデル化という作業がものごとの抽象化である以上、必ず一定程度の事實の捨象を伴う。その上、そのようにして創出した五代天下秩序モデルを中國史上の他の時代と比較すると、更なる割り切りが必要となる。よって、以上の評者の論述は誤りの指摘というべきものではない。違和感という表現するのはその

ためである。

すると、眞の問題は山崎氏の提起したモデルが中國史上に五代という時代を位置づける際にどれほど有用かという點にこそある。それゆえに、五代と時代の近接する唐代史・宋代史の専門家のみならず、廣く中國史に關心をもつ方々が本書を一讀されることを願う。

率直に言つて、本書を中國史上に位置づけるといふ上記の觀點から本書を評價する力量は評者にはない。ただ一つ言えるのは、本書の随所でも宋代への展望が記されるのみならず、山崎氏は近年すでに宋代に關する研究も精力的に行つてゐることである。今後山崎氏の研究が進んで「宋代天下秩序モデル」も提示された時、本書の價値もより鮮明となるだろう。山崎氏の研究の展開に今後注目したい。

註

(1) 『古代文化』六三―一、二〇―一

(2) 「秩序」については、序論末尾部分で「いわゆる國家が自國を中心に含め、かつ外世界に及ぶ政治的秩序構造體」と定義づけられたうえで、更に説明が加えられる。

(3) 以下の「天下」・「中國」はこの定義による。また、本書では十國のうち北漢は議論されず、荆南は「國」ではないとの立場から、それ以外の國々が「諸國」として論じられる。

(4) ここでは、しばらく李繼遷以後を西夏と呼んでおく。

(5) 豊島悠果「宋外交における高麗の位置附け——國書上の

禮遇の検討と相對化——」（平田茂樹・遠藤隆俊編『外交史料から十～十四世紀を探る』汲古書院、二〇一二年刊行 豫定）

（6）『資治通鑑』卷二八七、天福十二年八月條（四八・四九頁所引）

（7）富田氏の研究については、山崎覺士「五代十國史研究」（遠藤隆俊・平田茂樹・淺見洋二編『日本宋史研究の現状と課題…一九八〇年以降を中心に』汲古書院、二〇一〇）

で取り上げられる。沙陀研究については森部豊『ソグド人の東方活動と東ユーラシア世界の歴史的展開』（關西大學出版部、二〇一〇）「序論」参照。

（8）例えば、本誌六九一「所載」宋代兩浙地域における市舶司行政」を挙げておく。

二〇一〇年一月 京都 思文閣出版
A5版 三三九頁 六五〇〇圓